

# 老いとつきあう 楽しい知恵を探して

村上紀美子  
(医療ジャーナリスト)

## 入院を選ぶかどうか

# 最後は患者と周囲の決断

長い人生、「病気で入院」も人ごとではありません。「どうしても入院治療が必要」と関係者の意見が一致するときは、迷うことなく入院を選びます。ただし、「入院したほうが良いが、どうしますか」と選択の余地が残ることもあります。今回のテーマは、入院を選ぶかどうかを「どう考える?」です。

「長い人生、病気で入院」という説明です。Aさんは「入院できありがたい」と伝えました。

「ところが娘は「はい」と言いません。以前、Aさんが入院したとき、家族がいる日中は「病院が良い」と話しても、夜になると混乱して「ここはどこ?」「なぜここにいるの?」「家に帰る」と騒いで大変だったのです。

娘の説明を聞いた医師は「高齢の方の入院では、そういうこともあります。どうしても入院しなければならぬ状態です。」

状態ではありませんが、ご家族の意見をまとめて教えてください。何かあったら、自宅ですぐに対処できませんよ。それでもいいですか?と

話し合いを聞いていたAさんが「家に帰れるなら、そのほうが良いわね」と言い始めました。医師はAさんの状態が落ちていることを確かめ、帰宅を了承しました。そして「家で気をつけるポイント」

ト」をメモに書き、渡してくれました。

入院を選ぶかどうか悩んだときは、こんなふうには、入院する「メリット」と「デメリット」をてんびんにかけ、落ち着きごろを探します。「自宅に帰っても十分なケアが受けられないのに、なぜ在宅がいいのか」という意見もありますから、逆に自宅で過ごす

「メリット」と「デメリット」も考えましょう。かつては入院が必要だった治療も、最近では外来で受けられることが増えています。ですから「入院以外の治療」を探すことも大切です。Aさんの場合は、家族、医師、そして本人が話し合って真剣に考えた結果、落ち着きごろにたどりつきました。

ただし、どれだけ考えても最終的には、やってみないと分かりません。大げさに言えば人生観にかかわる問題です。

フリーランスの医療ジャーナリスト。神奈川県在住。石川県生まれ、愛媛県と東京都で育ち、社会学を学ぶ。在宅ケア・みどりケア・医療安全をテーマに、国内各地と9カ国取材。昨年まで3年間ドイツに暮らす。

今回紹介するイラスト「そいでよかさ」では、人生の最期が近い人と家族の決心を、いろいろな考えた末に決めたのなら、それでいいですよ。その決意を、僕は支えますよ。人生に決まりはないのだから」と、かかりつけ医が温かく受け止め、支えています。

この「僕ら」にあたる医師や訪問看護師ら、多くの医療福祉専門家と市民約5000人が、7月に長崎市内で開かれた「第21回日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会in長崎」に集まりました。4コマ漫画は、この大会のために描かれたものです。「そいでよかさ」は、長崎弁で「そいでいいですよ」という意味ですが、もっと方言独特のぬくもりや「包み込む」というニュアンスを含みます。

スーパーで転んでしまった80歳のAさん。頭から出血し、店の人の機転で素早く救急車を呼び、病院で治療できました。その病院に駆けつけた娘と医師が、Aさんの横で話しています。

医師は「いろいろな検査で異常はありませんが、後で何かが出てくる可能性はあります。一昼夜の様子を見たほう

「そいでよかさ①」  
先生、先日は病院で治療してもらって、ありがとうございます。お世話になりました。お父さんはどうですか?

「そいでよかさ②」  
先生、先日はお父さんの病状が、お世話になりました。お父さんはどうですか?

### 今回の楽しい知恵

入院するかどうか、どこでどんな治療を受けるか……。選択の決め手は患者の希望です。勇気を出して、丁寧な言葉で、本当の希望を伝えることがスタートライン。



「第21回日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会in長崎」に向けて、大会長の白髭豊医師（長崎在宅Dr.ネット事務局長）が仲間と考えた大会テーマに沿って、詫摩和彦医師が作製。医師のモデルは白髭医師。吹きだし中の長崎弁は、「気ィわるう」→気を悪く、「好いたごと」→好きなように、「よかごと」→いいように、「自分ち」→自分の家、「へばって」→疲れて

次週は富瀬規嗣さんの「新真健康論」です。